

次期クリーンセンター焼却処理方式選定について

【選定の経緯・背景】

焼却処理方式は、コスト面や安定的な処理など、廃棄物行政に大きな影響があるが、技術的にも専門性が高いことから、有識者にヒアリングを行った。

今年度、建替え整備事業の円滑かつ適正な推進を図るために庁内に設置した検討委員会で有識者ヒアリング結果も踏まえ、本市における最も相応しい処理方式の選定を行った。

【有識者ヒアリングとは】

千葉工業大学名誉教授、全国都市清掃会議技術部長他計5名の有識者により、4回開催し、評価方法に対する考え方や評価点数等のご意見を頂いた。

○処理方式の評価項目と配点

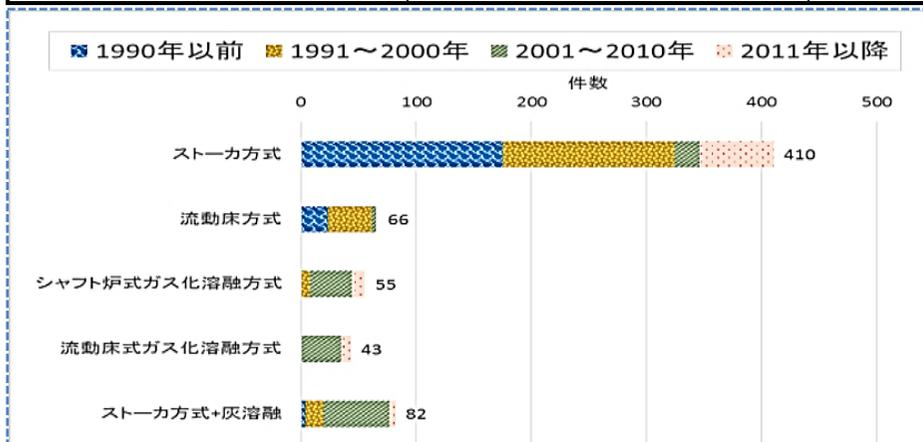
施設整備基本方針	評価項目		配点
効率的に 熱エネルギーを回収	①	熱エネルギーの効率的な回収が可能な方式	10
	②	消費エネルギーの少ない方式	10
安全性・安定性に 優れる	③	ごみ質の変動に広く対応可能な方式	10
	④	事故やトラブルが少ない方式	20
	⑤	施設整備・稼働実績が多い方式	20
災害に対して強靱	⑥	災害時に処理の継続及び災害廃棄物の受入れが容易な方式	10
経済性に優れる	⑦	ライフサイクルコストが優れている方式	10
	⑧	技術的、价格的競争が見込まれる方式	10

○焼却処理方式の選定

ごみの焼却炉にはいくつかの形式があり、それぞれに特徴を有している。その中で、各形式の定量面、定性面ともに点数化し評価することで、本市の現状に最も適した焼却炉の形式を選定した。

○ 処理方式一覧

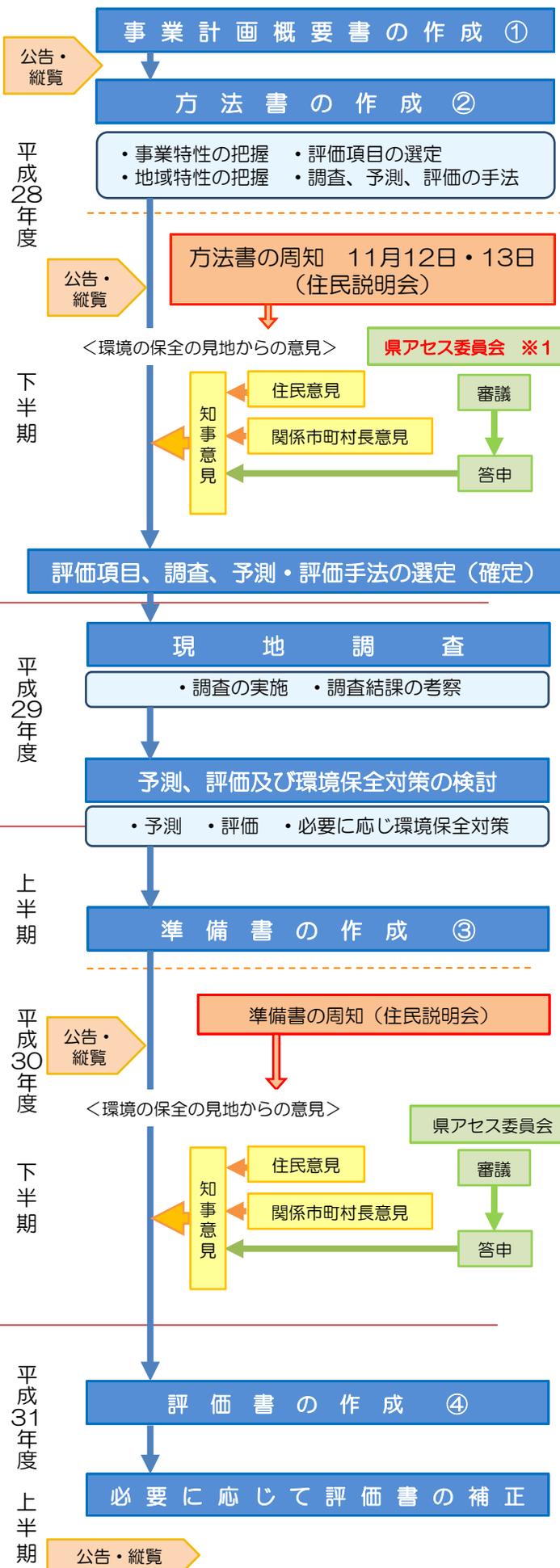
ストーカ方式	流動床方式	シャフト炉式 ガス化溶融方式	流動床式 ガス化溶融方式	ストーカ方式 + 灰溶融
<p>○安全性、安定性が高い。 ○多くの実績がある。 ○経済性に優れる。</p>	<p>○安全性が高い。 ○経済性に優れる。</p>	<p>○灰の発生量が少ない。</p>	<p>○経済性に優れる。 ○灰の発生量が少ない。</p>	<p>○灰の発生量が少ない。</p>
<p>△焼却灰は外部にて資源化する必要がある。</p>	<p>△焼却灰は外部にて資源化する必要がある。 × 応札する事業者が少ない。</p>	<p>× 事故やトラブルが多い。 × ライフサイクルコストが高い。 × CO2 排出量が多い。</p>	<p>× 事故やトラブルが多い。 × CO2 排出量が多い。</p>	<p>× 事故やトラブルが多い。 × ライフサイクルコストが高い。 × CO2 排出量が多い。</p>
100	70	60	60	70



○結論

各方式を点数化した結果、「ストーカ方式」が最も高い評価となり、本市のごみ処理体制に最も相応しい処理方式であると結論付けた。

※焼却灰の資源化については、じゅんかんプラン 21 で掲げた「H36 年度 焼却灰の資源化 5.6 千 t」の目標値を目指し、民間のセメント工場等の資源化施設への搬出を進めていく。



① 事業計画概要書

対象事業の環境影響評価が行われることを関係行政機関が予め把握し、以後の手続きへの移行の円滑化を図るもの。

② 方法書 (環境影響評価方法書)

方法書は、環境影響評価 (調査・予測・評価) の方法について、行政機関等からの意見を収集し、適切かつ円滑に環境影響評価を行うため提出するもの。

※1 千葉県環境影響評価委員会とは
 気象、大気、水質、土壌、植物、鳥類、生態系、景観等16分野、17名の学識経験を有する者で構成され、環境影響評価条例に規定する事項について調査審議して答申する機関。

③ 準備書 (環境影響評価準備書)

準備書は、環境影響評価 (調査・予測・評価) の結果について行政機関等からの意見を聴く準備のために提出するもの。
 事業者は準備書の内容について説明会を開催します。

④ 評価書 (環境影響評価書)

評価書は、知事意見を尊重して準備書の記載内容に検討を加え、必要に応じて準備書の記載内容を修正し、実施した環境影響評価の最終的な結果を周知するために提出するものです。